

## 舞台を彩るもの ～衣装のお話

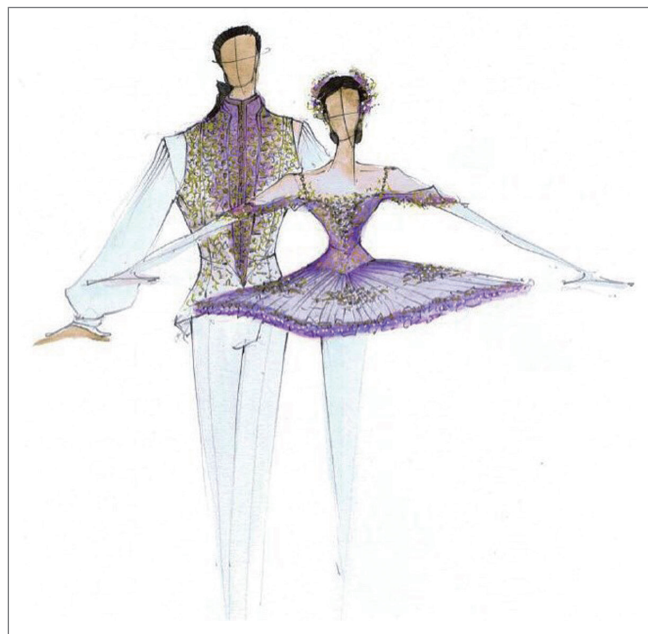
ヤング靖子

私たち観客にとっては勿論のこと、仕事として携わる人達にとっても舞台のその空間を作り上げている要素の一つ一つが非日常的です。そして、日常から離れたその空間とそこで過ごす時間を楽しみに行く、というのも劇場に向かう理由の一つだと思います。非日常の空間を創り上げる要素は様々です。ドラマティックな赤を基調とした客席、大掛かりな舞台美術、オーケストラ、ダンサー達の幻想的な踊り、そして衣装も私たちの想像をかきたてます。

元々、クラシックバレエは「非日常を経験する」というコンセプトから生まれました。おとぎ話を紡ぎ、美を愛でる芸術として発達する歴史の中で、衣装も必然的に重要な役割を果たすようになります。バレエの衣装は17世紀、太陽王と呼ばれたルイ14世の統治下で一気に洗練されます。華やかなフランス宮廷のドレスや士官の制服を元に、バレエの衣装も細かい刺繍など手の込んだデザインが生まれ、その流れが現在のクラシック作品の衣装に繋がっています。20世紀に入り新しい潮流であるネオクラシック、コンテンポラリーといったジャンルが確立された現在では、それ自体が美術作品のように豪華なものから、普段着のようなシンプルなデザインまで、ダンサーが身につける衣装の幅は広がりました。

デザインの歴史を紐解くと、衣装デザイナーのはしりはアートやファッションの視点からデザインを「実験」した芸術家達でした。今ではコンセプトから入っていくデザイナーもいれば、機能性を重視するデザイナーもいてアプローチは様々です。舞台衣装を専門とするデザイナー達の他にも、シャネルやラクロワといったファッションデザイナーがデザインを担当したこともあり、現代では 舞台衣装専門家だけの領域とは限りません。

デザイナーは依頼を受けると、作品の役柄に沿ってデザインを起こし、素材見本とともにカンパニーに提案します。それ自身が芸術作品といっても良く、デザインが決まった後は額に入れられ芸術作品として飾られることもしばしばです。日本でも数年前に国立新美術館で20世紀初頭の伝説のバレエ団バレエ・リュスの豪華な衣装展が開かれたので、ご覧になった方もいらっしゃると思います。



「眠れる森の美女」リラの精の衣装デザインスケッチ

体にフィットし、加えて見た目が良ければ、踊り自体も最高の仕上がりになる可能性は高くなると言い切れるほどに衣装とは大事なものです。それぞれの衣装は余裕を持って作られ、キャストが変わっても体型の違いに対応できるようになっており、丁寧に制作された衣装はバレエ団にとって歴史の一部であり、財産です。尊敬する先輩が手を通した衣装を身につけることは若いダンサーにとって名誉であり、衣装からインスピレーションを受けることもあると聞きます。それぞれの衣装は手作りで、大体2回から5回の仮縫いを経て完成します。作品が大掛かりであれば、衣装の数も増え、例えば「眠れる森の美女」では140着の衣装が必要となります。製作費用は400ドルから、衣装によっては3,000ドルもかかるものもあります。



「眠れる森の美女」のフィナーレ(リラの精が後方に見える)

前列中央オーロラ姫(内田千裕さん)から向かって左へ白猫(鈴木舞さん)、フロリナ王女(田中七瀬さん)を始め  
チュチュ姿のダンサーが舞台を華やかに彩った(2018年SDT)



衣装をテーマにした市民講座One@the Balletの一コマ

作品の時代や場所を表現する手段の一つでもあるので、衣装のデザインは重視されますが、その一方でダンサーの動きや体の線を考慮することも大切です。男性ダンサーにとっては腕の動きが邪魔されないこと、女性にとってはパートナーと踊る時に問題なく、動きが制限がされないことが重要です。伝統的なボディス(胴部)は最低8枚以上のパネルで作られ、男性ダンサーが女性を持ち上げて、回転させ易いように、ウエストラインの装飾を避けます。バレエといって最初に思い出す方も多いチュチュ(主に古典バレエで着用されるスカート状の舞台衣装)は9～14枚のチュール(多角形の網目を持つレース地)を上向きに折り畳んで縫いながら作られます。最初はくるぶしの長さだったチュチュは時代とともに短くなり、長めの丈のロマンチック・チュチュ、クラシックな形のベルチュチュなど様々な種類が出来ました。因みにフランスの画家ダガの有名な「踊り子」のシリーズに描かれたダンサー達のチュチュはベルチュチュです。



代表作の一つ「パキータ」の衣装を製作中  
それぞれのダンサーに合わせて行われる念入りのフィッティング



スケッチを基に熟練したスタッフによって衣装が縫われる様子

このように重要な役割を持つ衣装を管理する衣装係は、バレエ団にとってまさに縁の下の力持ちです。気の遠くなるような時間をかけて衣装を仕上げ、各ダンサーに合わせ、舞台当日も舞台裏に控えて細かい調整を行います。再演となる作品はそれだけ衣装にも負担がかかるので、補強などの追加作業は際限なく行われます。

芸術監督は衣装部屋を「オフィスで最も魅惑的な場所」と呼びます。何百着という衣装が並び、部屋の中心にある机ではクリスタル、ビーズ、パールなどの装飾と共にシルクやレース、ベルベット等の美しい布が広げられ、仕上がりを待っています。衣装以外にもティアラ、ヘッドピース、イヤリング、手袋などといった装飾品もここで管理されます。いずれもしっかりと装着しないと舞踊の妨げとなりますので、リハーサルではこうした点もチェックします。わたしも一度衣装部屋を見せて頂いたことがあります。天井から床まで整然と、でもぎっしりと色とりどりの衣装が特注のハンガーにずらりとかけてある様子は壮観でした。採寸が終わると担当の方がキビキビと寸法を直していきます。普段は静かですが、社会見学などでスタジオに子ども達が来ると、みんなが「わぁ!」と声を上げるお部屋です。

昨年上演したチューサン版「ロミオとジュリエット」では「運命」という役が登場しました。他の登場人物の衣装が17世紀のイタリアを再現する中、「運命」は全身銀色(顔も銀色です!)の体にピッタリした衣装です。初演が1984年ですから、当時はセンセーショナルなデザインだったのではないのでしょうか。今、見ても古さはなく、プロコフィエフのクラシカルな音楽に不思議と調和し、新しい息吹を古典の恋物語に吹き込むように感じたのは、振付もさることながら、衣装のインパクトもあったように思います。

画像・資料提供

Singapore Dance Theatre (SDT) One @the Ballet

プロフィール/近況: ヤング靖子

Ambassadors Council of Singapore Dance Theatre

今年に入って、スタジオでは芸術監督のお話を聞きながらバレエを鑑賞するOne@the Balletというイベントが再開しました。スタジオの入口には何点かの衣装が飾られていますので、是非近くに寄ってご覧下さい。丁寧に縫われた衣装には作り手の愛情と誇りを感じます。



白鳥の湖の衣装にまつわる動画  
(Lasalle College of Arts学生製作)



One @the Ballet プログラム

【お詫びと訂正のお知らせ】

2月号23ページの写真の説明の「バランシンの」は「プティパの」の間違いでした。謹んでお詫び申し上げ、ここに訂正いたします。(2021年2月6日)